

## 中学校国語教科書における〔言語事項〕 に関する記述の問題点

武 山 隆 昭

### はじめに

昭和五二年七月二三日に告示され、昭和五六年四月一日から施行された現行「中学校学習指導要領」の国語科の特徴の一つは「言語事項」の設定である。昭和四四年版指導要領では「Dことばに関する事項」として、文章の組み立て、文の組み立て、語句の用法、語句の意味、共通語と方言などについて指導するように示されていた。これに対して、昭和五二年版では、「A表現」「B理解」と並ぶ「言語事項」として、(1)ア文章論、イ文論、ウ品詞論、エ・オ語彙論、カその他の国語要説的事項、(2)漢字に関する事項というように、整理した形で示されている。これは中学校三学年にわたって共通であり、さらに、「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」に、

第2の各学年の内容の「言語事項」については、A及びBの指導を通して身につけさせるとともに、ある程度まとまった知識を得させるための指導もできるように配慮する必要がある。その場合、内容の取扱いが必要以上に細

部にわたったり形式的になったりしないように注意する必要がある。(傍線稿者)とあり、傍線部が現行学習指導要領の大きな特徴となっている。

これは、昭和五十一年一二月の教育課程審議会答申に、「言語教育としての立場を一層明確にし」とあるのを受けたもので、「国語をまず言語として認識し、その機能を十分に發揮できるようにしなければならない。」<sup>(注1)</sup>という考えに基づいて現行指導要領で特に強調されている点なのである。

さて、教科書は、「教科用図書検定基準」(文部省告示第二百八十九号、昭43)に、「必要条件」として「学習指導要領に示す内容で必要なものが欠けていない」ことが挙げられ、同じく「創意工夫が認められる」ことが必要条件であることと合わせて考えると、現在中学校で使用されている文部省検定済教科書が、「言語事項」をどのように記述しているかを点検することは大変興味深い。

さらに、「教科書で教えるのであって、教科書を教えるのではない」と言われてはいても、教科書が最も基本的かつ主要な資料集であることに変わりがなく、とりわけ、学校教育法第二十一条(中学校への準用規定は第四十条)に規定されているごとく、学校においては文部省が著作の名義を有する教科書か文部省検定済教科書を使用しなければならないのであるから、教科書の記述が現場の教育に与える影響は多大かつ重大で、それだけに責任をもった編集がなされていなければならない。点検は文部省だけに任せておらずに、国語教育に関係する者全員がするべきであると思う。

ところが、実際に中学校の生徒に教育を行っている現場では、今もって、教科書は絶対であり、教科書に書いてある事柄を教えわからせさえすればよいという風潮が一般的で、教科書の記述を批判的な目で見直すということは非常に少ないというのが実情である。特に、小中学校のように教科書の採択権が現場の教師の手から離れ、どこかで誰か

が決めたものを使わされているといった感じの現状では、各社の教科書を比較検討して選ぶということすら一般的には行われていない。高校の教師も、自分が受け取る生徒が中学時代にどこまでのことを学んできているのか知るべきであるのに、中学校の教科書をたんねんに読む高校の国語教師はめったにいない。

あたかも本年は、中学校教科書の改訂時期にあたっており、先日は次期学習指導要領改訂に向けて教育課程審議会が検討を開始したというニュースも流れて、教科書に目を向ける良い時期であると言える。

## 一 考察の対象と方法

現在中学校で使用されている国語教科書は、次の五種類である。(一)内は略称である。

光村図書出版『国語』 (光村)

三省堂『現代の国語』 (三省)

東京書籍『新しい国語』 (東書)

教育出版社『改訂 中学国語』 (教出)

学校図書『中学校国語』 (学図)

右の五種類の教科書の昭和六十年版使用版(昭和五十八年に四分の一改訂の検定済のもの)を対象とし、『言語事項』に関するそれぞれの教科書の記述を、項目別に比較検討し、問題点を指摘し、改善のための提言をする。ただし、文法事項に関しては、昭和二十六年版学習指導要領の「口語のきまりがわかる」以来、「ことばのきまり」として口語文法の指導は徐々に改良されはば定着しており、教科書間の差違や問題点も少ないと認められるので、本稿では採り上

げないこととした。

採り上げる項目は、音声と音韻、文字、語彙、言語一般と大別し、それぞれ細分して項目を設けた。項目の設定には、大学用の国語学概説テキスト類を参考にし、中学教科書の記述によって増補するという方法をとった。次章以後に掲げる各表の数値は、○印の中が学年、その右がページ数である。左側に示す項目に該当する記述に、何ページさしているかを示している。その場合、「言葉の窓」「ことばの学習」「言葉の研究室」「漢字の学習」等各社で呼称は異なるが、一―六頁にわたってまとまった記述をしている箇所その他、「言葉の学習」「漢字の練習」等として練習問題形式で、語彙や漢字の学習をするように一頁に四―六問出題してある箇所も、問題ごとに項目にあてはめ、 $\frac{1}{4}$ とか $\frac{1}{6}$ ページとして算入した。

## 二 音声と音韻

大学の「国語学概説」では、まず最初に採り上げ、十四時間ぐらいかける（一年に六十時間が原則であるから約四分の一）のが一般的である（人により年により多少の差はある）が、中学校の教科書では、表Ⅰにみるごとく、音声・音韻に関する記述は非常に少ない。わずかに光村が八頁を使っている他は、みな一頁内外とほとんど意を用いていないのである。

音声と音韻の定義を中学教科書に載せよとは言わぬが、国語科を言語教育の場として位置づけよう（指導要領の趣旨に沿って）とするならば、『音節連続が意味を持ち、単語を形成する（つくえ）は「えつく」となると意味を有しなくなる）こと。日本語の音節にはどんな種類があるのか、小学校で学習した五十音図を分析して、清音・濁音・半

表Ⅰ 音声と音韻

項 目	光村図書	三省堂	東京書籍	教育出版	学校図書
音声と意味	③ $\frac{2}{3}$				
音節一五十音図、音節の種類	②3	①付1			} ③ $\frac{1}{3}$
単音一母音、子音	①3			③1	
有声子音、無声子音、子音の調音					
清音、濁音、半濁音、直音、拗音					
語音変化(同化、交替、脱落、転倒)					
撥音、促音					
長 音					
連 濁			① $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$		
連 声			② $\frac{1}{2}$		
アクセント	③ $\frac{2}{3}$				③ $\frac{1}{2}$
イントネーション	③ $\frac{1}{3}$				
プロミネンス	③ $\frac{1}{3}$				
<小 計>	8	1	$\frac{5}{6}$	1	$\frac{5}{6}$

(備考：付は巻末付録所載であることを示す。以下同じ)

濁音・直音・拗音、さらに音素に分解して、母音（フィエトルの三角形）<sup>(注2)</sup>・子音・（半母音）・撥音・捉音・長音、<sup>レ</sup>せめてこのくらいは義務教育終了時に知っていた方がよいと思われる。ここで付言しておきたいのは、小学校におけるローマ字指導の退化である。四年生だけにほんの申しわけ程度出てくるだけでは、中学校に入ればほとんど忘れていくだろうから、母音と子音の指導に思わぬ苦勞をすることになる。稿者は中学校一年の時にもローマ字の教科書を買わされて少し習った。昭和二十六年版指導要領では、第九章で「中学校の国語科におけるローマ字の学習指導」として詳述しているが、その中で、「ローマ字の学習指導を通じて国語力の充実をはかり……中略……国語の文法や音韻に関する知識を増す」とある点は正しい見解であった。ところが、昭和三十三年版以後小学校のみとなり、指導要領改訂のたびにローマ字指導は退化してきている。音韻と活用の指導に資

するため、小学校六年でしっかりとローマ字の指導がなされるよう次回の指導要領改訂に向けて提言しておく。

連濁・連声も、歴史的背景や音韻論の説明は無理としても、現象の具体例と名称だけは知らせた方がよい。さらに、イントネーションやプロミネンスは少しふれるだけでよいが、アクセントについては一通り指導したい。英語の強弱アクセントと違って高低であること、全国に大きく分けて三通りのアクセントのあること、共通語におけるアクセントの種類は音節数プラス一通りあること、これだけはぜひ教えたい。

右のような観点からみると、光村が最も意を用いた編集になっている。まず一年で、母音（フィエトルの三角形も示す）と子音（調音器官図も示す）について述べ、日本語の音節がんとツを除いて母音で終わることが特徴であると説く。二年では、「音節の種類」と題して、音数律と音節の関係について述べ、一般的な音節と特別な音節（撥音・促音・長音・拗音）に分けて説明している。そして三年で、「音声と意味」（たとえば、医者と石屋の違い）について述べたあと、「遠い国」を「トーイ国」と引く音節を加えて発音すると強調する意味が加わることを述べ、続いて、イントネーション・プロミネンス・アクセントについて簡単に説明している。（アクセントについてはもう少し詳しい説明がほしい）これに、東書にみられるような連濁・連声についての記述を入れれば、ほぼ満足できる内容となる。次に稿者の提言であるが、右に加えて、語音変化の代表的なもの（同化・交替・脱落・転倒）については、例を挙げながら説明するべきであると思う。現行の教科書にはこのことに言及しているものはないが、中学三年生になれば十分理解できると思うし、むしろ言葉に対する興味を喚起する効果があるはずである。

たとえば、「長息」が「嘆き」に変化し（同化）、「淋しい」が「サビシイ」とも「サミシイ」ともいわれ（交替）、「ワタクシ（私）」が「ワタシ」となり（脱落）、「あたらし」が「あたらし（い）」となった（転倒）ことを知らせ、これらの語音変化がすべて「発音を容易にしよう、省エネしようとする人間の欲求」に起因していると説明すれば、生徒

一人一人の日常の生活とも結びついて、理解しやすくなるであらう。

現行教科書における「言語事項」の記述中「音声と音韻」分野の軽視は、「A表現」の中の「話すこと」、「B理解」の中の「聞くこと」の軽視と軌を一にするもので、軌道修正の必要を感じる。

### 三 文 字

表Ⅱでわかるように、文字については各社ともに二十頁内外をさいており、かなり充実している。しかし、内訳を見ると問題がないわけではない。

まず、「文字」には形・音・義の三要素があり、漢字のように三要素を具えた表意文字と、仮名やローマ字のように形・音二要素を有する表音文字のあること。仮名を音節文字というのに対して、ローマ字は単音文字ということ」は、最初にはつきりさせるべきである。この点に言及しているのは、教育・学図の二社のみで、しかも三年生なのである。文字学習の出発点において、右のような文字の根本を知らしめた上で、六書や部首のことに進むのではなくて、せっかく漢字について詳しい記述をしても根無し草の感じがする。

次に、常用漢字については、当用漢字からの歴史や制定の意図について何らかの記述をするべきで、巻末付録に一覧表を載せるだけでは不十分である。光村三年一五二頁の「言葉の窓 国語の表記と漢字」は、漢字仮名交じり文を日本語の一般的表記法とした上で、よく使われる漢字の字数、当用漢字から常用漢字への移行事情の概略を述べ、実際の社会生活では表外漢字も用いられることや、あまり用いられない表内漢字のあることの指摘と理由など、三頁にわたってよくまとめた叙述がしてあり大変よい。

表Ⅱ 文 字

項 目	光 村	三 省	東 書	教 出	学 図
文字の性質(形・音・義)				③ $\frac{2}{3}$	③ $\frac{1}{2}$
世界の文字					(①読物9)
漢字の歴史(甲骨文, 金文, 篆書etc)					
六書(含, 国字)	①1 $\frac{1}{2}$	①3①付4	①1 $\frac{1}{2}$	③4	①1
形成文字の構成		②2		(③ $\frac{2}{3}$ )	① $\frac{1}{2}$
部首(偏, 旁, 冠, 脚)(含画数)	①1	②1	①3 $\frac{1}{2}$ ②1 $\frac{1}{2}$	②3 $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	①1② $\frac{1}{2}$
漢字の音と訓(含, 重箱読)	①1 $\frac{1}{2}$ ③2 $\frac{2}{3}$	① $\frac{2}{3}$	①2 $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	①3 $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ②2③ $\frac{2}{3}$
音(二つ以上の音, 呉音・漢音・唐音)	② $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$
訓(熟字訓)		①1 $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$	②1 $\frac{1}{2}$ ③1 $\frac{1}{2}$		① $\frac{1}{2}$ ③1 $\frac{1}{2}$
読みにくい漢字の読み方	①1②1③ $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{2}{3}$	
共通する部首の漢字の音と意味	②2③ $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$		③ $\frac{1}{2}$	
同音(訓)異字の書き分け	②2③3	① $\frac{1}{2}$ 付4② $\frac{1}{2}$ ③1 $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{2}{3}$
同字異訓(音)の使い分け			① $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	
多義的な漢字(ex草原, 原油)		② $\frac{2}{3}$		① $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$
字形の似た漢字の読みと意味の違い		③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{2}$ ②1③1 $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{2}$
常用漢字について	③1 $\frac{1}{2}$		③2	③1 $\frac{1}{2}$	
筆 順		①付4	①1		①1 $\frac{1}{2}$
国語の表記と漢字	③3				
順序を表すのに使う漢字		② $\frac{1}{2}$			
序数詞に用いる漢字		② $\frac{1}{2}$			
現代仮名遣の要点			①1		
主な区切り符号の使い方			①2	③1	①付3
対立する意味の漢字			③ $\frac{1}{2}$		
漢字の音, 意味, 使い方を調べる			③ $\frac{1}{2}$		
小学校で学習した漢字の新しい読み					①1②1③1
漢字学習のくふう					③4
万葉仮名(真仮名)					} ③ $\frac{1}{2}$
平 仮名(草仮名)					
片 仮名					
ローマ字					③ $\frac{1}{2}$
＜小計＞(読み物は除く)	21 $\frac{1}{2}$	24 $\frac{1}{2}$	24 $\frac{2}{3}$	18 $\frac{2}{3}$	21 $\frac{1}{3}$



仮名については、万葉仮名から平仮名への歴史についてふれているのは学図だけで、三年で二段組みの下段五行を使つて述べているのみである。日本語の表記には、漢字と同じくらい重要な仮名の歴史について各社ともっと意を用いるべきである。

他の点では、表Ⅱに見られるように、東書と学図が他社にない独自の項目を収めており、工夫のあとがみられる。

しかし、学図にも欠点はある。学図三年一五〇頁は、「参考」〔6 漢字学習のくふう(1)〕として、漢字の読みを基にして四つに分類している。その中「1音だけで読む漢字」として、菊・髓・棒・欄など十九字を挙げている。その中に、常用漢字音訓表にはないが比較的よく用いられる訓を有する文字までも入れているのはまずいと思う。たとえば、棺(ひつぎ)、委(まかせる・ゆだねる)、局(つばね)、拙(つたない・まずい)などは、中学生でも小説などをよく読む生徒ならお目にかかるだろうし、その時疑問に思うだろう。さらに社会人になれば、このくらいの字の訓が読めなくては、「拙い人間」ということになってしまうだろう。特にひどいのは、常用漢字音訓表に立派に「となる」となり」とある「隣」の字を、音だけで読む字としている点である。学図の教科書には三年間を通じ訓はでて来ないのかも知れない(稿者未調査)。しかし、それだからといって、「音だけで読む字」の分類の中に入れたのでは、生徒は先々までも「隣」を「菊」と同じ性質の字だと覚えているだろう。こんな罪なことを文部省検定教科書がやって良いはずがない。大至急の訂正を希望するものである。

#### 四 語 彙

語彙は、現行学習指導要領が最も力を入れて改訂した点である。すなわち、

エ 語句の意味と用法、特に辞書的な意味と文脈上の意味との関係、慣用句の表す意味、類義語の意味の違いなどに注意すること。

オ 語彙を豊かにすること。

とある。簡潔をモットー? の現行指導要領において、二項目も用いていることに注目しなければならない。

表Ⅲに示したごとく、各社とも、語彙に關した記述にあてている頁数は、文字に關する記述と比べ必ずしも多くない。東書・教出の二社が、大旨指導要領の趣旨をくんでいると思われる他は、物足りないといわねばなるまい。

各社共通して採り上げているのは、熟語・複合語についてで、比較的頁数も多くさいている。例えば三省二年二九頁では、「ことばの研究③」として、二字の漢語の構成を、対になった漢字を並べて作られた熟語・似た意味の漢字を並べた熟語・上が下を修飾する熟語・上で動作を示し下でその対象を示す熟語・上の漢字が下の漢字の意味することを否定している熟語というふうに分類し、練習問題形式で学習するよう配慮している。他の教科書も大同小異であるが、「漢字の練習」として漢語の構成を分類させる形をとっているものもある。したがって、表Ⅲの一部は表Ⅱに入れる方がよいかと思われるものもごくわずかではあるが入っている。

次に類義語と対義語についての叙述が多く、意味の範圍を図で示すなどの工夫がみられる。

さらに、一つの単語が多くの意味を持ち(意味の広がり)、文中でどの意味に用いているか(多義語の文中における意味)については、学習指導要領の記述(エ)もあり、各社とも意を用いている。

右の三項目は、たしかに語彙指導の中で重要性の高いものには違いないが、音韻・文字の章で指摘したのと同じようにここでも、基本的事項の説明をぬきにした教科書が三社あることを問題点として指摘しなければならない。

この点について満足できるのは教出である。

表Ⅲ 語 彙

項 目	光 村	三 省	東 書	教 出	学 図
単語にはきまった形と意味がある		①1		①1	
単純語, 合成語, 複合語, 派生語		①1	①3		
複 合 語 の 構 成	②3 $\frac{1}{2}$ ③1 $\frac{1}{2}$	① $\frac{3}{4}$ ②3③2 $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{4}$ ②2 $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{2}$ ③3	②2 $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$
熟語の完成(漢字二字)		① $\frac{3}{4}$ ② $\frac{1}{2}$ ③1 $\frac{1}{4}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{2}$ ③1 $\frac{1}{4}$	①1 $\frac{1}{2}$ ② $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{2}$
〃 (漢字三字以上)		③1 $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{2}$ ③2	① $\frac{1}{4}$ ②1 $\frac{1}{4}$ ③1 $\frac{1}{4}$	① $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$
類 義 語 と 対 義 語	①3	① $\frac{3}{4}$ ② $\frac{1}{2}$	①3 $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{1}{4}$	①1 $\frac{1}{4}$ ②5③ $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{4}$ ②1③ $\frac{1}{2}$
多義語の文中における意味	① $\frac{3}{4}$		② $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$		
意味の広がり, 派生的意味	②3 $\frac{1}{2}$	①4②3 $\frac{1}{2}$	② $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$	①1 $\frac{1}{2}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{2}$
語 感 ・ 味 わ い	① $\frac{3}{4}$		②3		
類義語の使い分け(意味・用法)	③3				
接尾語の種類と特徴	① $\frac{1}{4}$		① $\frac{1}{4}$		① $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$
品 詞 の 転 成		②1		②1	
漢語・和語・外来語・混種語		①1 $\frac{1}{4}$	② $\frac{1}{4}$ ③2 $\frac{1}{2}$	①5③1	③2
漢語↔和語 漢語↔外来語(言い替え)			① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{4}$		
単語の意味に(上位語と) よる分類(下位語)		① $\frac{1}{4}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{4}$	②3	
文 章 語 と 俗 語		③ $\frac{1}{2}$			
位 相 語		③1 $\frac{1}{4}$		③ $\frac{1}{2}$	②2
慣 用 句 , 成 語		③1 $\frac{1}{4}$	① $\frac{1}{4}$ ②3 $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{4}$	① $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{4}$ ③5 $\frac{1}{4}$	①2 $\frac{1}{4}$ ② $\frac{1}{4}$ ③2 $\frac{1}{2}$
連 語 ・ 熟 語 の 意 味			② $\frac{1}{4}$	③ $\frac{1}{4}$	③ $\frac{1}{2}$
オノマトペの用法			① $\frac{1}{4}$		③ $\frac{1}{2}$
略 語			① $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$		
序 数 詞(物の数え方)			② $\frac{1}{4}$		
比 喩 と 語 義 変 化			③3		②1 $\frac{1}{4}$
連 想 す る こ と ば			② $\frac{1}{4}$		
同 音 語 と 類 音 語				① $\frac{1}{4}$	
今 と 昔 の 意 味 の 違 い					② $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$
語 源					③1
「くすんだ緑」のように微妙な色を形容する言葉をあげる 与えられた語を用いて短文を作る			① $\frac{1}{4}$ ③ $\frac{1}{2}$		
<小 計>	16 $\frac{1}{4}$	25 $\frac{1}{2}$	31 $\frac{1}{2}$	33 $\frac{1}{2}$	19 $\frac{3}{4}$

教出一年六九頁は「言葉の研究室 1 語句の意味と用法」と題して、「単語にはそれぞれ決まった形と意味があります」と書き出し、「かしこい」を例にとり、アクセントも含めた語形、意味（辞書に示されている意味と文章表現上での意味）について述べ、多義語の生まれる理由と過程、さらに類義語と対義語など単語どうしが意味のうえでのつながりを持っていることを、例を挙げて説明している。

次に、三省一年六六、一一九頁「ことばの研究①、②」では、演習問題形式で、「単語の意味」「多義語」「意味の派生」「感情的な意味」「単語のグループ」「単語の構成」といった小見出しのもとに、語彙についての基本的事項を学習させるようにしている。ただ、「単語の構成」すなわち単語が単純語と合成語（複合語・派生語）に分けることができるという説明は、もっと前にもって来るべき基礎事項であると思う。

音声・音韻については最も良く記述している光村が、語彙については学図とともに最も簡素な扱いとなっている。やはり、単語の形と意味、単語の構成（内容は三省に同じ）の項目は、語彙論の基礎として各社とも必ず入れてほしい。位相語に関しては、三省が幼児語を中心に年齢による位相、教出が男女による言葉の違い、学図が地域による位相すなわち方言についてふれているのみである。また、教出が読み物、「方言と共通語」加藤正信（一年二八五―二九〇頁）、「方言の研究」（二年二七四―二八〇頁、表現の学習として編集）を載せ意欲的である。これは稿者の持論であるが、東北地方や沖縄県から中学卒で東京等へ就職した若い人たちが、言葉遣いを笑われたために、無口となり性格まで暗くなってしまうという悲劇を繰り返さないために、全国（特に都会）の中学生に方言に対する正しい認識を持つてもらいたいのである。このためにも、教出以外の四社はもう少し方言について意を用いた記述をしてほしい。その他で語彙に関してぜひ収めてほしいのは、語源に関する記述である。

学図三年一六六頁に「〔参考〕 8 語源」として、「たそがれ時」「かはたれ時」を例に挙げて、語源を探る楽しみを

味わうように勧めているのが現行五種の教科書中唯一の語源にふれた記述である。他の四社は、語源にふれることはタブーであるかのごとく黙している。たしかに、日本語は西欧諸語と異なり語源研究の難しい言葉であり、その方面の研究は十分に進んでいるとは言えない。民間語源説に加え音義説や安田レプチャ語説、『大言海』の一部にある眉唾物の語源説等、問題点も多い。しかし、新村出博士の『東亜語源志』以来、榎垣実、山中襄太、岩淵悦太郎、村石利夫等といった各氏の、数多くの語源研究の書物が出版され、吉田金彦氏の呼びかけで先年発足した「日本語語源研究会」も活発な活動を続けている。それらの成果をふまえて、語源のはつきりしている語については、語源説明を大いにするべきであると思う。

稿者は、高校生の時国語の時間に、恩師某先生から「『つれづれ』という語は『連れ連れ』で、本来同趣の事柄が連らなつて起こる状態を表す語で、単調なことがらがいつまでも続けば誰でも退屈だと感じますよね」とか、「『なまめかし』の『なま』は『生ビール』のナマと同じなんだよ、未熟という意味だね」という説明を聞いて、言葉に興味を持つようになったことを覚えている。まだ古語辞典といえば三省堂の『明解古語辞典』しかない時代で、小学館の古語大辞典も岩波古語辞典もないのに、どのようにして語源に関する知識を得られたのか今さらながら尊敬の念を増す思いである。もちろん、さらに一步突っ込んで「つれ」はなぜ連続の意味なのか、「なま」はなぜ未熟の意になるのかと尋ねられれば、答えられないのが日本語の語源研究の限界で、音義説でも持ち出さないかぎり、言葉の恣意性で逃げることになる。

右のような限界を承知の上で、稿者も講読等において、語源説明から始め、そこから導き出される基本的語義（原義）を示し、さらに転義へと話を進め、本文中での意味を探るという手続きを取るようにしている。進度は少し遅くなるが、学生諸君はよくわかってくれるし、言葉に関してより一層興味を持つてくれることは事実である。

中学生にも、わかりやすい語源説明はどんどん取り入れて、言葉に対する興味と関心を喚起したいものである。語源に関する記述を次の改訂版にぜひ取り入れていただきたいと、各教科書出版社の方々に希望しておく。

## 五 言語一般

表Ⅳの上欄に示す項目は、音韻・文字・語彙・文法そして古文入門以外の〔言語事項〕に関する記述を、内容別に整理したものである。教科書によってそれぞれ特色がある。

三省は、各学年に「言葉遊び」的読み物を配し、楽しく言葉を学ばせる配慮が窺われる。同時にわらべ唱や諺など文化遺産の継承にも意を用いており意欲的な編集であると思う。

次に学図は、三省と比べ真正面から言葉を扱い、一年で辞典の上手な使い方、話し言葉と書き言葉の違い、ことわざの諸性格について述べ、二年八八頁では「国語表記のいろいろ」と題して、漢字と仮名の使い分け等について説明し、三年で送り仮名と仮名遣いについて基本法則を示している。(ただし、「オ列長音は『おとうさん』のように『う』で書く。」としているのは、『とおる』『おおきい』などの場合との誤解を生じないよう、もう一言説明がほしい気がする)学図三年では「7ことばと人間」という単元を設定し、金田一春彦先生の「日本人の言語表現」、大野晋氏の「人間を作ることばことばを作る人間」という読み物を載せている。ともに日本語を欧米語と比べて論じており、日本語の特徴を知るのに格好な教材である。

世界の言語の中における日本語の位置づけに筆を起し、発音・文字・文法・語彙・その他の小見出しをつけて六頁で「日本語の特色」を述べているのは、教出三年二・四頁である。このように、日本語を、西欧語との違いの点か

表Ⅳ 言語一般 (付・文法・古文入門・合計)

項 目	光 村	三 省	東 書	教 出	学 図
言語一般					
辞 書	①付3		①3		①1
日 本 語 の 特 色				③6	
数え歌, しりとり		①4	①¼		
唱えごと, 早口ことば, ごろ合わせ		②4			
類 推 に つ い て		②4			
こ と わ ざ		③½			①1
回文, ことば遊び, ダブ レット		③4			
形 式 と 効 果		③4			
話し言葉と書き言葉				①3	①2
敬語の本質 (文法よりも 言葉遣いとして)				②4	
国語表記のいろいろ					②2
送り仮名と仮名遣					③2
格 言					③1
<小 計>	3	20½	3¼	13	9
文 法(除古典文法)					
本 文 中	①21②20③13	①23②21③18	①12②9③10	①4②5¼③3	①20②24③12
付 録	①7②12③13	②7③5	①22②18③22	①25②33③24	①6②6③6
<小 計>	86	74	93	77½	74
古文入門					
文 語 と 口 語 の 違 い	②¾③¾	①1②2③2	①3②2③2	①2¾②3	①2¼③4
古 文 の 文 法	③1			③3	
<小 計>	¾	5	7	8¾	6¼
合 計	135¾	150½	160¾	158½	125
教科書全体に占める割合	15%	15.5%	16.6%	15.9%	13.7%

ら特色づけることは、学図・教出以外の各社にもお願いしたい。

## むすび

表Ⅳ最下段に、「〔言語事項〕関係の叙述に用いられた頁数の合計と、一年から三年まで三冊の教科書の頁数の合計に対する割合を%で示した。この中には、巻末付録の常用漢字一覧や文法のまとめといった箇所も算入（したがって総頁数も付録を含めてある）した。これによると、各社とも十五〜十六%くらいではぼ揃っており、項目別に見るとかなり差違があったことと比べ不思議な気がする。文部省の指導で総ページ数が抑えられていることからこうした結果となったのではあるうが、我が社の教科書は「〔言語事項〕の記述に力を注いだ点が特長であるといったセールスポイントの本（二十%くらいの頁数を使った）が出てきて良いと思う。

今回は特に採り上げなかったが、右の数字の他に、各社とも言語学者や国語学者や作家等執筆の「言葉に関する読み物」を掲載しており、これを加えれば割合はもっと多くなる。

以上種々考察を加えてきたが、国語教科書を良くすることが国語教育を良くする最も近道であると思う。副教材で補わねばならないというのでは情けないのである。実際に教科書を使い生徒さん達に教えておられる先生方が、教科書についての注文をもっと積極的に出してほしいし、教科書を作っている側の編集者も会社も（稿者も某社の高校用教科書編集者の一人であるが）良い教科書にするべく絶えず努力をしなければならないのである。



注

- (1) 市川孝他編『中学校新学習指導要領の解説と展開 国語編』(昭和五十二年八月、教育出版)
- (2) ジョーンズの四辺形母音図の方がよいとの考え方もあろうが、中学校段階では三角形で十分と思われる。

〔付記〕 本稿は、「國語學懇話會」昭和六十年八月例会で口頭発表したものに、追考を加えたものである。会の席上種々示唆に富む御意見を賜わった有馬煌史・浦部重雄・榊原邦彦・河内章・加藤主税の各氏に謝意を表する。